

赤十字の父 アンリー・デュナン

青少年赤十字指導用教材



本冊子について

赤十字の創始者アンリー・デュナンの生涯を描いた伝記で、子供たちにも読みやすい手頃な出版物は、意外に少ないものです。

このたび、光村図書出版株式会社が昭和55年に小学校5年生用に出版した国語教科書『国語五上 銀河』に掲載された伝記『赤十字の父 - アンリー・デュナン』を同社のご厚意により青少年赤十字の指導教材として転載させていただきますことになりました。

本伝記は、教科書に取り上げられ好評を博した教材であり、いまでもこの伝記により、アンリー・デュナンと赤十字に初めて出会った体験を語られる方々は少なくありません。

ここに同伝記を小冊子にまとめましたので、青少年赤十字メンバーや指導者育成の教材として積極的にご活用ください。

赤十字の父——アンリー・デュナン

赤十字の父とよばれるアンリー・デュナンは、今から約百八十年前の一八二八年五月八日、スイスのジュネーブに生まれた。母が豊かな博愛心を持った人であったので、デュナンも、おさなるときから、貧しい人や病気の人のために働きたいという、人道的な気持ちを養われて育った。そして、その気持ちは、デュナンの長いしょうがいを通じて変わらなかった。今では、世界の百七十あまりの国々に赤十字があり、国際平和と人類の幸福のために活動しているが、デュナンは、もえるような人間愛とすぐれた行動力によって、その設立に力をつくしたのである。

一八五九年六月二十四日、北イタリアのソルフェリーノで、はげしい戦いが行われていた。フランス・サルジニアの連合軍十五万と、オーストリア軍十七万との決戦であった。

朝早くから、大ほうはいっせいに火をふいた。方々でとつげきのラッパが鳴り、たいこの音が



イタリアの地図（ななめの線の部分が、当時のサルジニア王国。）

ひびきわたった。いたる所で血みどろの戦いがくり返され、多くの兵士がきずつき、たおれた。そのうえ、夕方からは、暴風雨になり、戦いにつかれ切った兵士たちをいっそう苦しめた。やがて、連合軍がオーストリア軍の強固な中央じん地をうちやぶると、オーストリア軍は、力つきてたいきやくを始めた。

そのよく日、ソルフェリーノから四キロほどはなれたカステイリオーネという小さな町に、一台の馬車が着いた。乗客は、ほおひげを生やした一人の男だけだった。

そのただ一人の乗客が、アンリー・デュナンだった。かれは、三十一才になっていた。デュナンは、北アフリカのフランス領内で、製粉事業をやっていたが、事業を広げるのに必要な土地や水を使わせてほしいと、フランス政府に願っていた。しかし、何年たってもゆるしがないので、北イタリアの戦場にいるフランスの皇帝ナポレオン三世こうていにじかにうったえ出してみようと、はるばるやってきたのだった。

馬車からおり立ったデュナンの近くを、町の人々が、あわてふためいてかけぬけていった。辺りには、よろめき歩いている兵士や、たなかで運ばれている兵士のすがたが見えた。

デュナンは、近くの教会に入っていた。そこは野戦病院になっていて、戦場から運ばれてくる負傷兵しやうで足のふみ場もないほどだった。かれらは、わらの上に横たわり、いたみのためにうめいたり、水を求めてさけんだりしていた。おどろいたことに、ここには、わずか二人の軍医しかいなかった。そのため、ほとんどの負傷兵たちは、手当ても受けることができず、ただ救いを求め続けていた。デュナンは、その有様をむねのはりさけるような思いで見つめていた。

このとき、かれは、イギリスのナイチンゲールのことを思いうかべた。戦場でかいがいしく負傷兵たちの看護かんに当たったナイチンゲールの記録を、デュナンは、深い感動をもって読んだことがあった。

「そうだ。この人たちを助けなければ——。」

デュナンは、直ちに活動を始めた。かれは、町の人たちを説きふせて、救護隊を作った。やがて、牧師や旅行者、新聞記者なども加わり、しだいにその数はましていった。デュナンは、町じゆ

うをかけ回り、救護に必要な物を差し出してくれるようによびかけた。

デュナンのこのよびかけにこたえて、薬や包帯、ふとんや衣類、食べ物や飲み物などが、続々と集まってきた。デュナンは、血とほこりでよごれた負傷兵の体をあららい、包帯を取りかえ、コーヒーやパンをあたえた。かれは、休むひまもなく看護を続けながら、きずついた兵士に話しかけ、元気付けてやった。

戦場から運ばれてくる負傷兵の数は、ふえるばかりだった。病院や教会はいっぱいになり、町の広場や道路にも、負傷兵があふれていた。その中には、連合軍の兵士だけでなく、きずつき、とらえられたオーストリア軍の兵士もいた。救護隊の人たちの中には、オーストリア兵の看護に反対する者もいたが、デュナンはきっぱりと言った。

「きずついた者に、ても味方もあるのですか。人間は、みな兄弟です。」

デュナンのこの言葉は、救護隊の人たちにも負傷兵たちにも、深い感動をあたえた。「みな兄弟」——それが、人々の合い言葉になった。

次の日、デュナンは、ソルフエリーノへ行き、小高いおかに登った。すると、そこには、想像

もできないような光景が広がっていた。眼下には、見わたすかぎり、死者と負傷者が、大地をおおってたおれているのだった。

「ああ、なんとおそろしいことだ。」

デュナンは、この光景を生きているかぎりわすれることができないと思った。

三日後の夕方、デュナンは、ナポレオン三世に会うために、フランス軍のじん地に向かった。とちゅうで道に迷ったりして、じん地近くに着いたのは夜中だった。よく朝早く、かれはじん地に行った。しかし、皇帝に会うことはできなかった。仕方なく、かれは、お付きの人に、ソルフェリーノの負傷兵の悲惨な有様を話し、一人でも多くの医師を送るために、フランス軍のほりよになっているオース



トリアの医師をすぐしゃく放するよう願ってほしいと言った。

「人道の名において、そつこくこのことを皇帝にうったえていただきたい。」
と、かれは熱心にたのんだ。そして、またカステイリオオーネに引き返した。

北アフリカでの事業を続けるために、土地と水を利用させてもらいたいとたのみに来たデュナンであった。しかし、かれは、そのことにはひと言もふれなかった。ソルフェリーノに来て、自分の事業よりも、もっと大切に急がなければならない仕事があることに気が付いたのである。

デュナンの熱意は、皇帝を動かした。間もなく、ナポレオン三世は、かれの提案をとり入れ、オーストリアの医師を無条件でしゃく放した。

やがて戦争は終わった。デュナンは、ふるさとのジュネーブに帰った。しかし、かれの頭からは、数万人に上る死者と負傷者のむごたらしいすがたがはなれなかった。

「あの人たちに、もっと早く、適切な手当てをしてあげることができたら——。」

デュナンは、このことを世界じゅうの人々にうったえなければならぬと思った。かれは、ソルフェリーノで強く心にきぎまれた思い出を、三年の月日をかけて一さつの本にまとめた。一八

六二年に出版された「ソルフエリーノの思い出」というこの本で、デュナンは、戦場の兵士たちの苦しみをくわしく書き、戦争を起こしてはならないことをのべた。そして、どうしてもそれができないなら、平和なときから、てき味方の区別なく看護する団体を作っておく必要のあることを強くうったえた。

デュナンのこのさげびは、世界の人々の心を動かした。そして、たくさんの人々から、はげましの手紙がよせられた。「レミゼラブル」を書いたフランスの作家ビクトル・ユーゴーは、「君こそ、人道を守り、自由のためにつくす人だ。」と言って、かれのうったえを全面的に支持した。また、イギリスの有名な作家チャールズ・ディケンズは、かれのうったえに感動して、この本の要点を新聞にしようかいはした。

次の年、一八六三年には、デュナンの願いは、早くも実を結んだ。二月に、デュナンをはじめ、スイスの法りつ家・医師・軍人など五人によって、戦争による負傷者を救護するための常設の国際委員会が、ジュネーブで作られた。ふつう、五人委員会とよばれているもので、これが、赤字たん生のもといとなったのである。

デュナンは、せい力的な行動を開始した。ヨーロッパの各国を回って、講演をし、協力を求めた。そのため、かれは、二か月ほどの間に、三千キロにおよぶ旅行をした。どこでもかれはかんなげいされ、国際委員会に参加することを約そくされたが、中でも、オランダの軍医バステイング博士などは、デュナンにすっかり共鳴し、進んで協力してくれた。

同じ年の十月、ヨーロッパ十六か国の代表がジュネーブに集まって、国際会議を開き、赤十字の設立を決定した。そして、傷病者はてき味方の区別なく看護すること、看護に当たる人々は中立としてあつかうことなどが取り決められた。

デュナンは、この会議の間、少し下がった所につくえを置いて、書記の役をつとめていた。やがて会議も終わりに近づいたとき、発言を求めて立ち上がった人がいた。オランダのバステイング博士であった。

「この気高い人道的な取り決めを生み出した人は、だれでしょう。それは、みなさんのかげにかくれるようにして、遠りよ深くすわっているアンリー・デュナン氏です。この人類の恩人に、心からのはく手をおくろうではありませんか。」



条約の成立した国際会議

会場から、さかんにはく手が起こった。デュナンは、思わずこみ上げてくるなみだをけんめいにこらえていた。

この会議で、赤十字の印も定められた。それは、デュナンとその祖国スイスの人たちの功せきを記念して、スイスの国旗の色を逆にした、白地に赤の十字になった。

一八六四年八月、再びジュネーブで会議が開かれ、赤十字条約（ジュネーブ条約）が、正式に成立したのである。

一八七〇年に、フランスとプロシアとの間で、また戦争が始まった。デュナンは、フランス赤十字の人々とともに戦場に向かった。

あるとき、デュナンは、きずついた人たちを、川を下って安全な場所に導くことになった。対岸からは、ひっきりなしにプロシア軍のほうだんが飛んでくる。四せきの小舟

に乗った人々の顔は、おそろしさに青ざめていた。フランス軍の兵士たちは口々にさげんだ。

「あぶない。やめろ。命をすてに行くようなものだぞ。」

しかし、先頭の小舟に乗りこんだデュナンは、手に持った赤十字の旗を信じていた。四せきの小舟は、川岸をはなれた。フランス軍の兵士たちは、かたずを飲んで見守った。デュナンは、強い願いをこめて、大きな赤十字の旗を右に左にゆくりとふり続けた。すると、今までさかんに鳴りひびいていたプロシア軍のほう声がびたりとやんだ。静まり返った川を、四せきの小舟は、静かに進んでいった。

この戦争が終わった後も、デュナンは、赤十字のことを考え続けていた。人道と平和のためには、赤十字の事業を、戦時の救護活動だけでなく、さらに広げていく必要がある。デュ



ナンの理想は、赤十字が、戦争や病氣などの人類の苦しみをなくすために、進んで平和の使いとして活動することであった。かれの考えは、しだいに世界の人々の間に広まっていった。

しかし、その後のデュナンの生活は、決して幸せなものではなかった。かれは、赤十字の仕事にすべてを打ちこみ、自分の生活のことは考えなかった。そのため、北アフリカでの事業も失敗し、多くの借金を負う身になってしまったのである。赤十字国際委員会の委員もやめたデュナンは、イギリス、フランス、ドイツなどの各地を転々としながら、貧しい生活を送らなければならなかった。時には、住む部屋がなくて、駅の待合室で夜を明かしたこともあった。こうして、デュナンの名は、しだいに世の中からわすれられていった。

一八九五年、スイスの新聞記者が、ハイデンという村でさびしい老後を送っているデュナンをたずねてきた。やがて、その会見記が、ヨーロッパ各地の新聞にのった。わすれられていたデュナンの名が、再び人々の心によみがえった。そして、デュナンを助けるための財団が設けられ、かれの生活も少し楽になった。

一九〇一年十二月十日、そのデュナンのもとに、一通の電報がとどいた。それは、この年初め



アンリー・デュナン

て平和への功労者におくられることになったノーベル平和賞を、アンリー・デュナンにおくるといふ知らせであった。ジュネーブの赤十字国際委員会では、かれのために受賞の祝賀会を開こうとした。しかし、かれは、ていねいにそれをことわった。そして、ノーベル平和賞の賞金のうちから、スイスとノルウェーの博愛事業にきふするよう、遺言^{ゆいごん}した。

一九一〇年十月三十日、美しい湖にのぞんだハイデンで、アンリー・デュナンは、八十二才のしようがいをとじた。

一九四八年に決議された赤十字の平和宣言^{せんとん}には、アンリー・デュナンの次のような意味の言葉が引用されている。

「各国民が団結して、良心にしたがって行動するならば、戦争を防ぐことができる。」

このデュナンの言葉は、現在も生きている。それは、永久に消えることはないであろう。

アンリー・デュナンの生涯から学ぶ

赤十字の父『アンリー・デュナン』を読んだ後で
アンリー・デュナンの生き方や
功績、赤十字について次の質問に沿って考えてみましょう。

- ①デュナンは、なぜソルフェリーノを訪問することになりましたか。
- ②デュナンは、戦場のどのような光景に心を動かされましたか。
- ③救護活動に当たったデュナンは、『みな兄弟』との思いをどうして持つことができたと思いますか。
- ④アンリー・デュナンは、『ソルフェリーノの思い出』の中で何を強く訴えましたか。
- ⑤デュナンの訴えは、世界の人々の心を動かしましたが、それはなぜだと思いますか。
- ⑥赤十字誕生のもととなったのは、何と呼ばれた集まりでしたか。
- ⑦赤十字条約が正式に成立したのはいつですか。

日本赤十字社
総務局組織推進部青少年・ボランティア課

注) 本書の無断転載はできません。